

眞実証の現実

緒方義英

親鸞の『顕浄土眞実証文類』（以下『証文類』と略す）は、必至滅度の願にみる難思議往生の内実をもって、浄土眞実の証を開顯せんとするものであるが、その難思議往生にみる必至滅度こそは、利他円満の妙位・無上涅槃の極果といわれる「成佛」への道程を明かすものである。

いま必至滅度の道理を『証文類』に窺えば、しかるに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相廻向の心行を獲れば、即のときに大乘正定聚の教に入るなり。正定聚に住するがゆゑに、かならず滅度に至る。

と、凡夫は往相廻向の心行を獲ること、即時に正定聚に入り、正定聚に住す故に必ず滅度に至るとされている。この親鸞の自釈中、住正定聚と必至滅度は所依の願文に因るが、「往相廻向の心行を獲れば、即時に正定聚に入る」とは、全く親鸞の己証である。

では、ここにいう「往相廻向の心行」とは、何を意味するのであるか。「往相」とは、曇鸞の『論註』を釈して、廻

施功德・願生浄土により、自身は言うに及ばず他者をも自然に「往生させる相」であると解し、さらに往相が大悲廻向に因ることより、その弥陀の用きを「往相廻向」と領解しているようである。

また「心行」とは、『証文類』の名義撰対を釈すなか、菩薩所得の心である般若と方便の功德を顯示する際に、その心と行を指して用いられ、前後の文脈を踏まえて考えるとき、「心行」が菩薩の四種心・五種行を指すものであると推知されるものである。

親鸞のいう「往相廻向の心行」が、弥陀廻向を因とする菩薩の四種心・五念門行であれば、「往相廻向の心行を獲る」とは、衆生教化すべく菩薩の、衆生をまさに教化する礼拝・讚嘆等に認められよう。則ち、菩薩は五念門によつて衆生を教化するが、その個的現実に五念門が開かれる、凡夫に菩薩の心行が開かれると。

菩薩教化をもつて、凡夫に心行が回向されれば、必ず滅度

に至るとされる。その必至滅度とは、「必」の語に「必定」と「必然」の意を教え、「自然」の義を立てるもので、「必至」は行者一切の計らいを離れた自然の用きを指し、「滅度」は往生の必然として、おのづから至ることに定まっている覚悟の境地であるというのである。つまり、必至滅度は浄土の自然性であり、往生をもって解決されるといえる。

さて、浄土の自然性はそのまま住正定聚の内容として、必至滅度の願に顕されることである。願文には

たとひわれ仏を得たらむに、国の中の人天、定聚に住し、必ず滅度に至らずは、正覚を取らじ。

とあり、その成就文は

それ衆生有りて、かの国に生るれば、皆ことごとく正定の聚に住す。所以はいかん・かの仏国の中には、もろもろの邪聚および不定聚なければなり。

と示されている。

この成就文では住正定聚の理由を、浄土に邪定聚・不定聚の無きことをもって明かすが、それはちょうど浄土と穢土とを相即せしめる難思議往生にあつて、願力の有無を問題とすべく、三聚を関係づけている。願力によらねば往生浄土なく、往生なければ浄土と穢土の相即もなければ、本願に乗託せぬ邪定聚及び不定聚に、難思議往生のいわれがないのも当然である。かかる邪定聚・不定聚の非存在性をもって、往生

浄土住正定聚を反顯すれば、まさしく住正定聚を浄土の即住性に認めることができるのである。

また『如来会』の成就文は、

かの国の衆生、もしまさに生まれんもの、みなことごとく無上菩提を究竟し、涅槃のところに到らしめん。

と、往生人と願生者を並立させ、両者に同等の利益を確約しているが、往生人は還相をもって説かれる正定聚の機を、願生者は往相にたつて示される正定聚の機を指すとすれば、一正定聚機に二相の相即をみる事ができよう。般若に向かうべき往相と方便に参入すべき還相が相即廻向され、往生をもって成就すれば、正定聚に往相即還相が開かれていることも自然である。

『証文類』では、さらに

もし人ただかの国の清淨安樂なるを聞きて、剋念して生ぜんものと、また往生を得るものとは、すなはち正定聚に入る。

と『論註』を解して、願生者と得往生者が即ち正定聚に入ることを教示している。入正定聚が願生（往相）の即時に、また往生（還相）の即時にあることは、正しく弥陀の往還二回向の内容が、唯一名号廻向であり、その念仏に往相（他利）即還相（利他）を開くべく正定聚機が、凡夫のうえに実現されるという事態である。

では、何故浄土に往生すると、正定聚に住し、往相即還相

を開くのであろうか。それは、浄土が阿弥陀佛の正覚華より

化生する所であり、その正覚(念仏)をもって往相・還相と衆生教化するからである。弥陀正覚の華より往生する所が浄土であればこそ、往生に穢土・往相と浄土・還相が相即するということにもなる。思うに往生とは、「穢から浄への質的転換」というようなものでなく、「穢即浄・浄即穢の現実」であるのとみることができのではなからうか。というのも難思議往生の内実が、穢土と浄土の相対にはなく、穢土即浄土という相依関係にあることで、生死即涅槃・煩惱即菩提という弥陀の正覚に、はじめて往生の現実があると思われるからである。

穢土と浄土の相即、これが他ならぬ阿弥陀如来の願力に因るのであれば、その念仏廻向に往・還二相が開かれ、正定聚として滅度が必定されることになる。如来の衆生済度が現実的なものとして用く、その念仏が即ち南無阿弥陀佛である。南無阿弥陀佛の念佛に往相と還相をみるから、そこにはじめて不断煩惱得涅槃という事態も起こりえるのであろう。

願生の念佛者(往相)はどこまでも煩惱を断じえないが、大悲はその不断煩惱をもって往生の障碍とはせず。そのままに往生・還相させるのである。「不断煩惱」に往相を示し、「得涅槃」に還相を現せば、その利益が示現される念佛をもつて、往還二相の相即を正定聚に成立させているものといえ

よう。

もとより往相は還相への願望をもって生じる故に、よく還相をはらみ、還相は往相のうえに作用する故、往相をして還相せしめるものである。この不一不異相即の関係を成立させているものが南無であり、念仏に往相即還相が開かれる正定聚機の現実であらうかと思われるのである。

浄土真実の証果は、往正定聚・必至滅度と示されている。ここに往相廻向をもって往相せしめる現実に、即得往生・入正定聚・必死滅度を開くことは、還相をもって往相し、往相に還相を開くという二種廻向の利益によるものあり、二回向相即成就して正定聚に往相即還相を開くものである。

往相はどこまでも往相であって還相でなく、還相もまた往相でなく還相でしかありえないのであるが、これを相即成就せしめることは、如来が衆生を大悲し、その大悲をもって念佛を回向される、その回向成就の利益にみる事ができるのではなからうか。かかる真実証の現実に、正しく往生の「難思議往生」たる所以があらうかと思われるのである。

〈キーワード〉 正定聚、往相、還相

(龍谷大学大学院)